

## 張廣達氏の論文「内藤湖南の唐宋変革論とその影響」 を読んで

藤 田 純 子

「歴史研究は創造的見解が重要である」と張廣達氏は冒頭にこう述べて、二〇世紀初期に唐宋時代觀を提起した内藤湖南（一八六六—一九三四）を中国史研究が發展してゆく中で創造性に富んだ一人の歴史家として取り上げ、その学問的営為を跡づけて彼の提起した唐宋時代觀（唐宋変革論）がいまだに日本（或いは世界）の中国史研究を志す後学に大きな影響を与え続けていることを述べている。

特に最近中国では内藤湖南とその中国史研究、時論などが次々翻訳されるとともに、内藤湖南研究も盛んとなっている。発表される論文著書が、一九八〇年代

以後現れてきて、九〇年代から二〇〇〇年代にはいると一段と多くなってきたており、内藤湖南が注目されていることがわかる。こうした情況の中で張廣達氏の内藤湖南論が表されたのである。

内藤湖南は周知のように日本における中国史研究の先達であり、京都大学の中国史研究の基礎をつくり、時代区分という概念を歴史研究に導入して近代的な歴史研究の道を拓いた人である。

上述したように張廣達氏はこの論文で唐宋変革論を中心に据えて論ずるとともに、内藤湖南の学問の特色について考察をおこなっている。その内容は戦後の日

本の東洋史学界で進行した唐宋変革論をめぐる論争にも触れ、関連する膨大な数の文献を読みこなされて学説史を書かれているが、とりわけ唐宋変革論が持つ意味や内藤湖南の中国史研究の本質を考察して、歴史研究それ自体の意味をも考えさせる内容になっている。そこがこの論文の魅力である。

張氏の論文の原題は「内藤湖南的唐宋変革説及其影響」(『唐研究』第十一巻——唐宋時期的社会流動与社会秩序研究専号——所載、二〇〇五年)であり、その内容構成は次の通りである。

## 序文

### 第一章 内藤の唐宋変革論

#### 第一節 唐宋変革論概述

#### 第二節 内藤の唐宋変革論より見た時代区分の特徴

### 第二章 内藤の唐宋変革論は中国文化を主体とする

する

#### 第一節 内藤青少年期の人格形成

#### 第二節 中国遊歴と中国の学者との交流

### 第三節 内藤史学と現実との関わり方

### 第三章 唐宋変革論の影響

#### 第一節 内藤と弟子達

#### 第二節 戦後の内藤史学に関わる論争

#### 第三節 アメリカの学者の「唐宋転型」論についての見解

### 第四章 内藤史学がもたらした啓示

長編の論文なので逐一紹介することはできない。主な内容をアトランダムに紹介しながら、張氏は内藤湖南の歴史学の真髄をどのようなものと理解しているかという点を中心に、あわせて紙幅に余裕があれば、戦後の日本における中国史研究に与えた内藤湖南の影響をどのようにとらえているかについて触れてみたい。

第一章第一節は唐宋変革論の概略である。一九二二年に発表された「概括的唐宋時代観」は「最も完成度が高く、彼の深思熟慮を反映し」た文章であり、「内藤湖南は中国史を上古・中世・近世の三段階に分け、唐末五代を中世から近世にいたる過渡期と規定し、唐

と宋との間に明確な違いがあると指摘しているところが概括的唐宋時代觀の主要な意味である」とし、内藤湖南が指摘した唐宋間の顕著な違いを挙げてゐる。

この学説は宮川尚志によつて「内藤の仮説」として欧米に紹介された経緯も述べ、この学説は欧米の学界に受け入れられた。米英の中国史研究者として名高い蒲立本(Ed. G. Pulleyblank)、杜希德(D. Twitchett)等多くの人は内藤湖南に高い評価を与え、その他の研究者もその著述中に「内藤の学説を」頻繁に引用した。こうしてみると内藤説が国際学界の評価を獲得したのは、彼の卓越した洞察力と文章の深い内容とわかりやすい表現に功績を帰すべきであることは疑いのない所であるとする。

ついで唐宋変革論というこの史論或いは仮説がなぜ日本で最も早く生まれたのかということを問題にする。中国では陳寅恪が唐代という時代の特徴を、「総括していえば、唐代史は前後二期に分けられる。前期は南北朝を受け継いだ旧い局面を終わらせ、後期は趙宋以後の新局面を開いた。政治社会經濟に関するものは同

様であり、文化芸術に関するものも亦例外ではない」(『論韓愈』『歴史研究』一九五四年第二期、後『金明館叢稿初編』に収録)と論じて、内藤と共通する認識を示しているけれども、それはかなり時間的に遅かった。この時間の差を生んだのは何なのかと、張氏はいふ。そして一九世紀末から二〇世紀初を振り返り、明治維新期の日本には幕末の蘭学(洋学)の基礎の上に西洋の知識体系が移植され日本は西洋をモデルにして教育制度と學術研究の体制を改革し、人材養成に力を入れ近代的な学問分野を確立した。また西洋の学問を全面的に翻訳紹介し、朝野を挙げて学問体系を構築するのに力を尽くさないものはなかった。

明治維新史の編纂を例にとり、明治政府には太政官系と宮内省系による修史事業があり、そのほかに、政府系の史談会系・彰明会(藩閥系)・旧幕府系が幕末史の編纂に加わり、民間では立志会系・民友社系・憲政史系など様々な結社による歴史編纂があつて、多くの学者が維新史研究に携わり空前の盛況を呈した。同時に西洋の歴史研究の方法と叙事の体例が日本に導

入され、近代的な歴史学が確立する上で最も重要な規範となった。このような時代背景の中から内藤の唐宋変革論が生まれたのも偶然ではない。日中両国の學術の置かれていた様態の相違が、内藤湖南と陳寅恪との距離となつて現れていると張氏は見ているのである。

第一章第二節は内藤湖南の時代区分論の特徴について述べている。

内藤は日本ではじめて西洋史の時代区分という方法を導入して中国史研究を行った。この時代区分という方法は、「伝統を突き破る」衝撃的效果をもつていた。何故ならそれまでの中国の伝統史学はただ王朝の交替を叙述する「歴史」だったからであり、長年にわたつてその枠から飛び出さなかつたのは、時代区分という概念がなかつたからである。

内藤の時代区分はルネサンス以来の西欧の歴史学における古代・中世・近世と断代する三区分法に依拠しているように見えるが実際にはただ似ているだけである。内藤は「もし意義のある時代区分をしなければなら

らないとすれば、必ず中国文化發展の波が引き起こす情勢の變化を觀察しなければならぬ」、「文化の時代的特色によつて時代を分ける」とつまり広義の文化史を基礎に据えて時代の特色を考え、前後の違いを比較する視点を以て時代の本質を把握する所に主要な考えがあつた。内藤が時代区分法をどのようにあつたかを次のようにいう。

彼（内藤）は中国自体の内在的發展の経路に基づいて中国を考察し、若干の王朝の共通性およびその發展の趨勢を帰納してこれを整合させ、いくつかの中間の時間的段階として、中国史の「朝代」に置き換へること、これは彼と各先駆者との時代を分ける方法の最もはつきりしたちがいである。彼の時代区分が完全無欠ではありえない。いくつかの具體的考えでは、人々によく異なる見解を提起し、彼と議論した。しかしこれらの議論、異議とはちょうど逆に内藤の時代区分が彼の中国の歴史と文化が古代より現在にいたるまでの通史的理

解に基づいて、しかもこれは機械的に西欧の時代区分法を摘み取って外側の枠組みの縁飾りとしただけではないことを証明している（一七頁）。

内藤が「近世」の内容をいかに考えていたかについて張氏は以下のように見ている。内藤が唐代と宋代との間に画期を置いたのは、平民の「台頭」という史的現象を宋代近世説の重要な指標の一つにしていたからである。宋代を中国の「近世」とする論点には京都大学での同僚・内田銀蔵、原勝郎の影響があった。平民の興起は内田、原の研究対象であり、当時すでに田口卯吉の『日本開化小史』が出版（一八七七年―一八八二年）されており、また民権主義の歴史家たとえば竹越與三郎、徳富蘇峰、山路愛山等の著作にはそのことがはつきりと説明されている。平民を重視することは当時の日本史学界の時流なのであった。

内藤は応仁の乱の研究を行い、そこに平民の力の上昇があることを発見し、それと共通する史的現象が唐宋の転換する時にあることを認識した。これには明らかに当時の日本の歴史家達の使う概念の影響があった

と考えられる。内藤は日本・中国の文化全体に対する歴史観から出発して、「おおよその歴史はある面からいうといつも下層民がしだいに向上発展する記録である」という見解を何度か発表してきた。この歴史観に基づいて、内藤は日本史を研究する時に、応仁の乱には大名華族が公家華族に代わる面と下層民がしだいに向上発展する面とがあり、これは歴史の分水嶺であると指摘し、中国史に論及した時には、唐宋の際に出現する変革は貴族から君主制に向かって移行することと平民の勢力が台頭することとが、時代を画する特質になっていると考えたのである。それが「近世」を特徴づける内容なのである。

さらに内藤の歴史のとらえ方にどのような特徴があると見ていたであろうか。

「内藤の中国史の時代区分は、中国の広義の文化（政治、経済、社会、学術などを総合する内藤の文化概念）の深層の中に起伏する変化に対する考察に由来している」と見る。内藤は世界文明の中の東洋文明の中核をなすのは中国の学術と文化であり、中国史の発

展にはそれ自身の規範があると認め、中国史の時代区分は中国自身の歴史的発展の道筋に依拠すべきであると主張した。

中国史それ自身の発展の道筋は表面を見ているだけではわからない。張氏はそれを内藤が使った言葉「潜運黙移」を引いて、内藤の中国史観を説明する。それはすぐ気がつくような形をなして、表面に現れているわけではない。しかし歴史の底流を注意深く見ていれば認められる兆しであり、それを見極めて変化を覚らなければならぬ。中国の歴史は表面的相対的な平静さが変化を深く覆い隠してしまっており、人々はともすればその平静さを停滞と誤認する。

「表面では順逆入り乱れて流れている水も、その底の底では必ず一定の方向に進んでいるのである。当面の中国の各種の問題を解決する鍵はこの暗流を見と出すことである」(『支那論』緒言)とか、「あまねく見て広く考え、折衷しないものはなく、そうして天数世道、潜運黙移の故は、犀を燃やし燭を照らして見るようなものである。洽覽博稽、莫不折衷、而天数世道、

潜運黙移之故、猶燃犀燭照焉」(岡崎文夫『魏晉南北朝通史』内藤の序、原文は漢文)と述べていることから、内藤の深い中国史理解はこの暗流(つまり「潜運黙移」)に気づき、中国の広義の文化の深層に起伏する変化を考察して、唐と宋との間には時代の特質に違いがある。それゆえ内藤は、唐宋の間に画期があると主張することが出来たのであると張氏は見るとして張氏は、内藤の史観の核心は「潜運黙移」にあると確信し、それを次のように述べる。

徳川幕府三百年の宗社の倒れたことも、時勢の潜運黙移が引き起こした作用であると見ている。まったく「潜運黙移」の四字はそのまま内藤の文化史観の眼目としてみることが出来る。内藤史学の体系の中で過渡期、或いは転換の時期はすでに歴史の、過去の、脈動である。……

過渡期、或いは転換期は何をもつてこのような鍵となる意義を具有するのか、ただ内藤の広義の文化史観である「潜運黙移」というこの眼目を把握

することではしか確かな理解を得ることはできない。

もし内藤が唐宋の転換の時期を中国の全体の歴史の潜運黙移の大きな枠組みの中に置いて詳しく見るのでなければ、もし彼が日本の「応仁の乱」を導き出した社会変動を知り尽くしていなければ、中国中世の貴族と宋代政治文化の違いを深く知って、前後を比較対照していなければ、彼は中国社会自体が中世から近世へ転向する変化の鍵を発見し、宋代からの中国近世の特徴を概括することはできなかったであろう。内藤の時代区分及びその唐宋変革論は個人の広く深い学識に基づいているだけでなく、憚ることなく談論が行われ、その性質がすでに一定の歴史理論に基づく論説を生み出しているということがわかる。これは日本の明治維新以後の新しい歴史学の動向の中で、文化の伝承に対する創造的な刷新であり、近代歴史学の規範と分析の枠組みを参照して、中国の歴史上の変化の大勢に対して行う思想の構築である（二三頁）。

さらに内藤が過渡期に重大な意義のあることを強調するのは、唐宋の際というこの一過渡の段階が過去を受けて未来を開く鍵として重要なのである。こうして内藤の日本史研究から得た示唆は中国史研究に活かされ、中国史を対象として行った時代区分と、それをめぐる思想的営為から唐宋変革論は生み出され、これこそが中国史研究の新生面を切り開いたのである。

過去からいえば、唐代の貴族政治はまさに唐宋の際の一過渡期の段階を通過し、宋代の君主専制体制に転換することであった。未来からいえば、宋代以来千余年の歴史の趨勢と平民勢力の増張は中国の共和制の前途を予知することであった（二三頁）。……内藤の中国史の著作を総覧すれば唐宋変革論は彼の中国史の時代区分の鍵となる。この論は中国の過去を広い視野で概略し、前後の歴史に筋道をつけているだけでなく、さらに辛亥革命以来の現実に関連づけて中国の当面の脈打つ動きを把握している。内藤の宋代近世説は広義の文化

的角度から将来を予測し、中国は君主制から共和制に向かって歩むことを論証し、ある意味において彼個人の現実に対する関心を反映している。またこの関心から彼は中国が近世から近代化

(modernity 現代化ともいう) に向かう国家に対して理論的思考を与えたのである(二四頁)。

と張氏がいうように、内藤は同時代に起こった辛亥革命とその後の国民革命期をどう評価するかという問題意識に立って、「近世」を措定した。それは近世という変革されるべき時代を措定することによって清朝後の共和制を予測することであった。歴史をどのように認識するかという問題は極めて現在の関心と結びついている。現在をどう歴史的に位置づけるか、唐宋時代観はその意味で張氏が指摘するように、中国の過去から未来への道筋に対する歴史的認識の産物なのである。

さて第三章第二節は戦後日本における唐宋変革論をめぐる論争が記述されている。かいつまんで述べると、ここでは一九七〇年代からの日本における中国史研究の変化を表す動向に触れ、特に重要なことは八〇年代

に至って中国史研究会は内藤説を放棄し、宋代後の社会が封建社会であるモデルも捨て去り、中国は戦国時代から一貫して専制体制が続いていることを論証したと日本の中国史研究の新しい動向に触れている。

第三節はアメリカの研究者による中国史研究について触れる。宮川尚志が紹介した「内藤の仮説」はおおむね受け入れられた。一九八〇年代になって郝若貝(Robert Hartwell)の論文「七五〇—一五五〇中国の人口・政治・社会の転型」(“Demographic, Political, and Social Transformations of China, 750-1550”, *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 1982)、韓明士(Robert P. Hymes)の撫州の郷紳研究(“Statesmen and Gentle-men: The Elite of Fuzhou, Chiang-hsi, in Northern and Southern Sung”, *Cambridge University Press*, 1986.)が発表され、内藤説に修正が加えられハートウェルとハイムスの研究によれば唐宋間の変化よりも両宋間の断層の方が大きいと主張している。そして両者の研究をふまえて、宋代は中国史上の一転型期(変革期)であるという観



念が受け入れられ、宋代史研究が活発に行われている。

最近一〇年来に包德弼 (Peter K. Bol) の「唐宋転型の反思——思想の変化を主として」(中国語訳劉寧『唐宋転型的反思——以思想的变化為主』、劉東編『中国學術』第一卷第三期、北京、商務印書館、二〇〇〇年) という研究が出されるに及んで、「内藤の唐宋変革説の核心である宋代に君主専制制度が強化され、平民が台頭した」という説は否定された。「包德弼は唐宋社会の変革は政治エリートと文化エリートの中だけでおこり、士大夫の身分は新しく設定され、しだいに变化して『地方エリート』になった。内藤が描いた門閥制の終結と平民の崛起する社会の画面ではない」と。現在のアメリカにおける中国史学界は内藤説を乗り越えて、「新社会史」の概念による研究が盛んにな

っているという。

内藤の学説が乗り越えられたからといって、内藤の学問の価値が減じるわけではない。張氏は「中国に内在する理路から中国史を考えるのは内藤が拓いた中国史研究に対する至大の貢献である」という。内藤が「唐宋変革論」という概念を生み出した学問の方法に敬意を抱いている。さらに付け加えるならば、貴族の衰退と君主権の増大・平民の興起という要素を並べてそこに時代の変化を読み取る比較のまなざしをもっていた内藤湖南は、歴史学が思考する学問であることを唐宋変革論で示した。内藤湖南には外国の歴史を研究しているという自覚はなかったと思われるが、張廣達氏はこのことに深い理解を与えているようである。

